

# 自閉症幼児の他者理解の発達と療育上の留意点

～愛着対象の形成に焦点をあてて～

狗巻修司\*

## はじめに

自閉症幼児の他者理解の発達は、これまで多くの先行研究で論じられてきた。近年では、「心の理論」とよばれる一連の研究において得られた知見から、自閉症幼児の中核的障害を他者の心を理解する能力の欠損、つまり「心の理論」の欠損として扱おうとする立場も見られる<sup>1)</sup>。また、他者理解に関連すると考えられる、模倣や要求行動、共同注意行動などの諸行動においても、その発達的特徴が指摘されている<sup>2)</sup>。

これらの一連の研究による知見は、厳密に統制された実験場面における結果に基づいており、そこでは、極力自閉症幼児と他者との関係性を排除し、中立的な他者を想定しているといえる。しかし、実際に彼らが日常生活の中で結ぶ他者との関係は、各々個別性を持っており、実験場面で見られるような他者理解とは異なる形で、その障害が認められることが考えられる。また、日常の文脈の中では健常児は他者の心について早期から言及しているという指摘もあり<sup>3)</sup>、自閉症幼児についてもどのように他者理解が発達するのか、健常児との共通性と障害による独自性とを、

日常生活の中で見ていくことが、自閉症幼児における他者理解の障害を探る一助になるのではないかと考える。

そこで本論文では、他者理解の尺度として、「愛着対象」との関係性の質に着目する。幼児期の日常生活の中で結ぶ他者との関係において、量的にも質的にも最も充実しているのが愛着対象との関係であると考えられ、多くの先行研究が愛着対象の形成と諸行動の発達との関連を指摘している<sup>4)</sup>。しかし、自閉症幼児の愛着についての研究も、実験的場面で論じられることが多く、日常生活の中でその質的な検討を行なった研究は極めて少ない。そのため、ここでは、別府の提起した自閉症幼児における愛着対象の形成の段階<sup>5)</sup>を軸にして、諸行動の発達に関する研究を概観し、その関連について理論的整理を行なうとともに、そこから、その段階に応じて展開する療育のありかたについて考察を加えていきたい。

## 1. 自閉症幼児の他者理解に関する先行研究の概観

自閉症幼児の発達的な特徴として、対人関係の発達における特異性を指摘することができる。自閉症幼児は、他者理解の発達におけ

\*いぬまきしゅうじ（京都府立大学大学院福祉社会学研究科  
博士前期課程 在学中）

るつまずきを示すことが多く、他者と相互主体的なやりとりを展開することが困難であり、幼児期早期において、何らかの理由で「相手と一体となる」ことが阻害され、二項関係およびその発展形態である三項関係の形成が特異的に遅れるのではないかと考えられている<sup>6)</sup>。ここでは、二項関係と三項関係の発達のプロセスと、他者理解に関係する諸行動の発達のプロセスについて整理し、自閉症幼児の対人関係における障害について考察することにする。

### (1) 「二項関係」「三項関係」の発達と愛着対象の形成

健常児の場合、三項関係は生後8ヶ月以降に成立するとされ、それ以前の段階では二種類の二項関係が存在する。すなわち、第一項の子どもに対して第二項が人となる関係（＜自己—他者＞の二項関係）と、第二項が物となる関係（＜自己—もの＞の二項関係）である。乳児期の発達として、3ヶ月頃になると首がすわり、正面を向きとらえることができ、自分で首を少し動かし、追視できるようになる。時を同じくして、こちらからの働きかけに対して、ほほえみかえしができるようになり、誰に対しても、また人形や紙に書いた人の絵に対してもほほえみをかえすといった「普遍的なほほえみかえし」が成立することが明らかにされている<sup>7)</sup>。このように、首がすわり追視できるようになるという身体的成熟と、生来的に人に対する志向性が高いという生物的メカニズムが重なるこの時期に、＜自己—他者＞の二項関係は成立するといえる。一方で、＜自己—もの＞の二項関係は、それまでモロー反射のような原始反射が手指の動作で見られるものの、5本の指がひらいてくるのは5ヶ月以降のことであり、まだ取るこ

とはできないけれども見たものに向かって手を出していくという、運動系と感覚系の関連、協応動作が始まるこの時期まで待たなければならぬ<sup>8)</sup>。

自閉症幼児においては、近年注目されている共同注意行動や、提示・手渡し行動、要求行動において障害が見られることが明らかにされており、このことから二項関係とその発展である三項関係に障害があることが疑われている。徳田らによれば、自閉症幼児は、二項関係において、＜自己—もの＞の関係が＜自己—他者＞の関係よりも先行して成立する<sup>9)</sup>。健常児の場合、＜自己—他者＞の二項関係が先行することで、人との関係の上にもとの関係が展開されていき、他者を通して正しいものの操作を学習したり、他者への志向性が高まるにつれてものを通した遊びなどが展開されたりしていく。しかし、自閉症幼児の場合「人との関係が希薄なまま、ものとの関係が先行するゆえにそのものを操作する意味性を理解する」<sup>10)</sup>には至らないために、ものとの関係において固執傾向が強まり、他者の働きかけに対して反応を示したり、自閉症幼児から自発的に他者に対して直接的な接触を求めたりする＜自己—他者＞の二項関係の形成が遅れるのではないかと考えられる。

このように、自閉症幼児は、二項関係の段階から対人的・社会的相互作用の障害が認められ、外界との交渉活動が極めて制限される。しかしながら、認知発達とは相対的に独立した姿勢運動機能が二足歩行を可能にするため行動範囲が拡大し、子どもが対応を余儀なくされる認知領域を飛躍的に拡大させることになり<sup>11)</sup>、さまざまな社会的障害が見られるようになり始める。また、出現し始めていた言語や身振りが消失してしまういわゆる「折れ線型」といわれる自閉症幼児の現象も、この

ような対人的・社会的相互作用の発達のゆがみがある原因として推測される。しかしながら、自閉症幼児の最早期における身体面での発達や、ほほえみかえしのような生得的なものについて言及した研究は見当たらず、この発達のなゆがみがどの段階でどのように生じるのかについて今後検討を進めることによって、障害の早期発見へとつながるのではないかと考えられる。

## (2) 他者理解に関連する諸行動の発達のプロセス

### (a) 共同注意行動、要求行動、指さし行動

生後9ヶ月から12ヶ月前後において、他者との関係性が二項関係の段階を越え、物を介して他者と関わる三項関係へとやりとりの構造の変化が見られるが、その背景に共同注意行動という、対象に対する注意を他者と共有する行動の獲得が関連すると考えられている。

共同注意行動には、「応答的共同注意行動 (responding joint attention)」と「自発的共同注意行動 (initiating joint attention)」という2つの側面がある<sup>12)</sup>。健常児の共同注意行動の発生時期は、おおよそ9ヶ月から12ヶ月であり、応答的共同注意行動から自発的共同注意行動へと発達していくことが明らかにされている<sup>13)</sup>。つまり、初期の養育者との二項関係のやりとりのなかで、他者の働きかけを受動的に受け入れるという側面と、自分から他者へ能動的に働きかけるという側面とを経験し、その中で自己と他者の意図を調整し、理解し、応じるという相互主体的なやりとりを構築していき、やがて物を介した三項関係のやりとりが行なわれるようになる。その中で、他者の視線や意図が自分とは異なるこ

とを知り、他者と自己の志向性が分化する過程の中で、意図の中身を知るようになると考えられる。

近年、自閉症幼児の共同注意行動における障害が注目されている。別府によると、自閉症幼児も健常児も発達とともに指さし行動を理解できるようになるものの、後者の健常児が後ろ方向の指さしで後方を振り返ったあと実験者に向かって対象を共有したことを確認する「共有確認行動」が見られるのに対し、自閉症幼児にはこのような行動がほとんど見られない<sup>14)</sup>。このことから、自閉症幼児には「伝達意図を有する存在としての他者理解を伴う」共同注意行動が成立しにくいという点があることが明らかとなった。また、Dawsonらも、健常児と比較し、自閉症児が視線をともなったポジティブな感情を示すことがほとんどなく、母親の笑顔に反応することが少なかったことを明らかにし、自発的・応答的共同注意行動における障害と、ポジティブな感情を共有するための能力の障害との関連を指摘している<sup>15)</sup>。このことから、応答的共同注意行動については発達とともに獲得していくものの、自発的共同注意行動の発生に障害があると考えられる。

しかし、ノンバーバルコミュニケーションの中でも、要求を引き出すための身ぶりや、他者との身体的・社会的相互作用を引き出すための身ぶりにおいての有意差は見られず、自閉症幼児は共同注意行動だけに障害が認められる<sup>16)</sup>。共同注意行動の指標の一つとされる指さしは、「驚き・興味・再認」、「要求」、「叙述」、「質問」、「応答」に区分され、発達に伴ってこのプロセスをたどることが明らかにされている<sup>17)</sup>。「叙述」の指さしは、それまでの「驚き・興味・再認」や「要求」の指さしとは異なり、三項関係の成立が基盤とな

り、自ら積極的に関係を作っていく、意図的・伝達の働きかけである。つまり、三項関係の形成に特異性が認められる自閉症幼児においては、「叙述」の指さしが成立しにくく、そのために共同注意行動だけに障害があると考えられる。

また、共同注意行動において、大部分の自閉症幼児に障害が見られるという事実は、他の障害と自閉症を分別できる可能性がある。障害の早期発見・早期対応という観点から、共同注意行動は、乳幼児診断などでのスクリーニング方法につながる可能性があり、国内においても大規模な調査<sup>18)</sup>も行なわれており、自閉症の共同注意行動の障害に関して、今後の動向が注目される。

#### (b)模倣

模倣に焦点を当てた先行研究では、生後2年間に、大きな変化が起こり、模倣が出現する割合が増加するだけでなく、模倣される行動の質が変化することが指摘されている<sup>19)</sup>。この変化の背景には、めざましい社会性の発達があり、自分たちと関係のある大人たちの行動に対して興味を持ち、同じようにしてみたいという要求が強くなるためであると考えられる。模倣は遊びやコミュニケーションをはじめとする社会的相互作用の発達にとって重要な働きをするようになる<sup>20)</sup>。

では、他者理解に障害を持つとされる自閉症幼児における模倣はどのような特徴があるのであろうか。神園らは、自閉症幼児における運動・動作の模倣は、音声の模倣に比べ、極めて乏しかったことを明らかにしている<sup>21)</sup>。すなわち、音声の模倣はコミュニケーションや母子間の遊び、さらには、自己の行動を制御する機能をも果たすようになるのに対し、運動・動作の模倣は、結果だけに注目し

てそれを再現しようとする、「結果の模倣」にとどまり、不完全な模倣となる。小山も「自閉症は模倣の発達、とくに身体運動の模倣に障害がある」<sup>22)</sup>と同様の指摘をしている。以上のことから、自閉症幼児の模倣の特徴として、運動・動作の模倣に障害があることが強く推定されるとともに、行為の結果のみの模倣となってしまっており、そのモデルとなる他者への理解に何らかの障害が疑われる。

自閉症幼児の模倣の獲得に関わる認知発達については、「機能を理解した上での物と物との関係づけが安定し、模倣の出現前には、因果性の探索や物の搜索、物の細部の探索」が見られ、それに加え、「安定した人との関係性と空間のなかで物への興味が高まり、対物行為の中での探索、その結果としての因果性の探索といった認知発達があつて模倣が安定する」<sup>23)</sup>とされている。多田・加藤は、自閉的傾向を有する子どもに対する簡単な工作課題において、課題の遂行を動機づけてはじめて模倣が安定して出現することを示唆している<sup>24)</sup>。つまり、模倣の出現には、物と物との因果性の理解とともに、他者に対する理解の水準、とりわけ愛着対象に対する理解の水準が重要となり、その他者からの動機付けによって模倣が安定して出現するのではないだろうか。

さらに、多くの研究の知見から、自閉症幼児の多くがコミュニケーションの障害を持つとされる<sup>25)</sup>。模倣は言語の基盤とされる表象の発生と拡大に主要な役割を果たしている。表象は模倣によって発生し、遊びを通じて拡大していくものであるため、自閉症幼児は、＜自己—他者＞の「二項関係」の形成が脆弱なために、他者理解に障害をもち、その弱さゆえに模倣が出現しにくく、言語の発達に障害が認められる事が考えられる。

## 2. 自閉症幼児の愛着対象の形成

### (1) 自閉症幼児の愛着発達の特徴

Sigmanらの先行研究では、自閉症幼児においても量自体は少ないが、見知らぬ人よりも養育者に接近—探索行動をよく行い、その意味で養育者への愛着行動が成立していること、しかし同時に、その質については問題があることが示唆されている<sup>26)</sup>。伊藤によると、自閉症幼児が3歳になると愛着対象を形成するに至るものの、自分の要求を一番よく満たしてくれて、近くにいると最も心地のよい存在として愛着対象を用いるとし、このような愛着関係を「道具的安全基地」という、これまでの愛着の概念とは全く異質の概念で説明している<sup>27)</sup>。この概念は別府の提示している「不安・不快な場面で求める関係」の段階と同義としてとらえることができる<sup>28)</sup>。

伊藤は「道具的安全基地」を、他の障害児には認められない自閉症幼児特有の愛着であるとし、母親を「心理的安全基地」として用いないとしているが、この段階を愛着発達の終着点とできるわけではない。別府は、自閉症幼児でも健常児とはそのプロセスは異なり、発達的な課題が多いものの、「心理的安全基地」としての愛着対象を形成することを明らかにしている<sup>29)</sup>。すなわち、自閉症幼児が「道具的安全基地」として愛着対象を用いるのは、発達上のプロセスの一部であり、発達とともに、愛着対象に対して具体的な行動を求めるだけでなく、心理的な安全基地としての役割を求めるように変容していく。

これらの研究をまとめると、自閉症幼児は対人関係の獲得に困難があると言われながら、その出発点における養育者との関係にお

いて、何らかの愛着を形成することは確かである。しかし通常の場合は、養育者への愛着が安定してくると他者への社会的行動も発達してくる。ただし、伊藤が自閉症幼児の対人関係の発達のプロセスを詳細に検討した結果によると、養育者への愛着を形成することができても、逆に他者への社会的行動が消失する<sup>30)</sup>。このことから自閉症幼児の愛着形成のプロセスには、健常児のそれとは異なり、独自のプロセスが存在することが示唆されている。

### (2) 自閉症幼児期における愛着対象の形成の発達の意義

二項関係・三項関係という最早期の発達の段階から他者理解に障害が認められる自閉症幼児においては、愛着対象との関係性の中でもその障害が反映し、健常児とは異なるプロセスで、しかも、それとは質的にも異なる、何らかの愛着関係を築いていくものと考えられる。しかし、日常の生活の中で、最も重要な位置を占め、かつ、対人関係の発達の基礎となる愛着対象との関係性が、発達の大きな意味を持つことは両者ともに同じである。また、別府によると、自閉症幼児が愛着対象を養育者だけでなく、保育士など、身近な他者へと拡大していくことと、諸行動との間に関連があることが明らかにされている<sup>31)</sup>。そこで、ここでは、1.において検討した、他者理解の発達のプロセスに、愛着対象の形成がどのような意義を持っているのかについて検討を加えていくことにする。

対象に対する注意を他者と共有する行動である共同注意行動は、他者との関係性が二項関係から三項関係へと構造的に変化する過程において重要であることについて明らかにした。共同注意行動は物を介して他者とやりと

りする中で初めて出現し、一人では成り立ち得ないものである。また、その成立には、他者の意図を受け止めて自分の意図をそれに合わせて調整する他者理解が必要となるであろう。Sillerらは、あそび場面における自閉症幼児とその養育者の関係性と共同注意行動、言語発達との関連について調査し、養育者が自身の行動を子どもの遊びに適合させる頻度が高いことが、1年後の共同注意行動と10～16年後の言語産出において、発達的に良好であることと関連していることを示した<sup>32)</sup>。この指摘は、自閉症幼児において、大人の側からの共同注意行動の働きかけと、子どもの行動に合わせることの重要性を示唆しているとともに、できるだけ早期に愛着対象との関係を構築することの重要性を示唆しているといえる。

模倣においては、他者との関係性が模倣の性質に影響を及ぼすことが明らかにされた。このことから、自閉症幼児にとって、志向性が高い他者である愛着対象の形成が、模倣の出現にとって発達的に大きな意義があるといえる。モデルが既知の人物の場合、相互作用を通して形成された両者の関係が愛情的あるいは親密であるほど、子どもの模倣をより多く誘発することが明らかにされている<sup>33)</sup>。つまり、モデルとなる他者と子どもとの情緒的つながりは、子どもの模倣に影響を及ぼすために、自閉症幼児にとっても、愛着対象となる他者の形成が、模倣の出現を促進する可能性があり、愛着対象の形成が果たす発達の意義は大きいと考えられる。同時に、模倣が他者との関係性に影響を及ぼすと考えることも可能ではないだろうか。つまり、自閉症幼児が他者への志向性が高まると模倣が出現し、それがコミュニケーションや遊びの手段として用いられ、他者との関係の質を変化させる

ことが予想できよう。以上のように考えれば、自閉症幼児が愛着対象を形成することの重要性と同時に、自閉症幼児の模倣を出現させる意図的・組織的な取り組みが、早期における療育実践の一つの可能性として考えられる。

以上のように、とりわけ乳幼児期においては、養育者や保育者などの愛着対象の存在と、その愛着対象との〈自己—他者〉の二項関係、または三項関係のありかたが重要となってくると考えられる。自閉症幼児は、〈自己—他者〉の二項関係が不十分なまま歩行を獲得してしまうために共同注意行動が発達しにくく、また、人に対する志向性も低いことから、自閉症幼児の側から他者と〈自己—他者〉の二項関係を構築していくことが困難であり、模倣の出現に障害が見られる。このような障害の特性を持つ自閉症幼児において、愛着対象を形成することが契機となり、諸行動の発達が促されることが多くの先行研究から明らかにされている。つまり、健常児と同様に、自閉症幼児が愛着対象を形成することは、諸行動の発達と関連し、社会性が拡大していくという、プロセスの重要な第一歩であり、発達的に極めて意義があるといえる。同時に、自閉症幼児の愛着対象の形成の意義と、そのプロセスをふまえた療育実践が求められるであろう。

### 3. 自閉症幼児の愛着対象の形成と療育

#### (1) 愛着対象との関係の質の段階と諸行動との発達の関連

社会性の発達は、愛着対象との一対一の親密な相互的關係から始まり、その後、多くの人と関わりを持つ中で発達する。自閉症幼児

は「心の理論」研究で明らかにされているように、他者の心的状態についての理解に障害を持ち、共同注意行動や模倣においても障害が見られる。しかし、健常児とは発達のプロセスが異なるものの、それらの行動は、他者との関係、とりわけ愛着対象との関係と関連して発達する。そこでここでは、別府が提示した、自閉症幼児の愛着対象の形成の3つの段階を軸にして、愛着対象との関係形成過程と諸行動の発達について考察していく。

#### (a)「密着的接近」の段階（第1段階）

この段階は、母親に代表される特定の養育者との分離不安と表裏一体の関係にあり、特定の養育者以外を拒絶する。これは、母親等の愛着対象との分離不安による不快な情動の出現によるものと考えられる。このことから、この時期は養育者に代表される愛着対象と「時空間的な密着」を求める段階であり、「情動や意図を持つ主体」として他者を理解しておらず、また、相手とは異なる主体であるという自己の認識についても十分に発達していない。同時に、分離不安による不快な情動を解消するために、常同行動やこだわりが出現し、ものに固執する傾向が強まると考えられる。つまり、この段階では、母親に代表される特定の養育者との関係を除き、＜自己—もの＞の二項関係にとどまっていると考えられる。

この段階における諸行動の発達は、「密着的接近」対象以外の他者への志向性の低さを色濃く反映している。特定の養育者との分離に際して、その不快な情動を解消・緩和するために、他者ではなく、ものとの関係性を心の支えとする。要求行動においても、情動や意図を持った主体として他者を理解していないため、この段階では「無志向的で不明瞭な

要求行動」やクレーン現象などが見られる<sup>34)</sup>。また、模倣に関しては、密着的接近対象であった母親の模倣は成立していたのに対し、その他の他者との関係の中では模倣が見られないことを明らかにされている<sup>35)</sup>。つまり、これらは＜自己—他者＞の二項関係よりも＜自己—もの＞の二項関係の発達が先行しているとともに、密着的接近対象との関係性と比較して、その他の他者との関係性が希薄であることがその原因があると考えられる。要求行動と同様に、両者への志向性の差や、密着的接近対象以外の他者との二項関係が十分でないことが認められる。

#### (b)「不安・不快な場面で求める関係」の段階（第2段階）

この時期は、愛着を示す対象は、第1段階と変化はないが、愛着対象との関係の質で変化が見られる。それは、自分が不安・不快な状態にあるときに、ものに対する常同行動やこだわりに入り込むのではなく、自分を快の状態にさせる具体的行動を愛着対象に求め、愛着対象とその行動を行うことで、快の情動を引き起こすことができるようになったということである。この段階は、伊藤の「『道具的安全基地』としてのアタッチメント」の段階であり、「自分の要求を満たしてくれて、近くにいるともっとも心地よい存在」として、愛着対象を理解しているといえるであろう。つまり、この段階では、他者の心の存在はまだ理解していないが、行為を行なう主体として他者を把握する、「行為者」としての他者理解が獲得されているといえる。このことから、この段階においては、愛着対象に限定されているものの、人への志向性が高まり、＜自己—他者＞の二項関係が形成されていると考えられる。

このような愛着対象との関係の質の変容は、諸行動の発達でも重要な契機となる。第1段階においては、母子分離などの不安・不快な場面でものを心のよりどころにしていたが、この段階では心の支えとしての機能ではなく、もの自体が遊びの対象となり、他者とのやりとりを成立させる働きがあることが明らかにされている<sup>36)</sup>。また模倣に関しても、他者への志向性が高まるにつれてその量が増加し、同時にその対象が養育者だけでなく、愛着を示す保育者などに拡大する。

〈自己—他者〉の二項関係の成立は、愛着対象と一対一の関係の中で、ギビングやショージョーイング、手ざしなど、共同注意行動と関連する指さし行動の出現の基礎となる機能の発達が促され、「驚き・興味・再認」「要求」の指さしが出現すると考えられる。別府によると、後ろ方向の指さし行動の理解が成立する時期と、この段階の他者理解の同期性を示唆しており<sup>37)</sup>、〈自己—他者〉の二項関係が形成され、愛着対象への志向性が高まるにつれて、指さし行動の理解や出現が促されることが考えられる。また、この段階では、愛着対象との関わりが増加するにつれて、自閉症幼児に愛着対象との「意図のズレ」を経験させることになる。この「意図のズレ」は、要求行動を出現させたり、相手の要求を受け入れたりというやりとりを生じさせ、他者とさまざまなかけひきを行い、自分の要求を通そうとする。このやりとりの出現によって、愛着対象と特定の場面・行動を結びつけるだけでなく、相手を「情動や意図をもつ主体」としてとらえることが可能となるのではないだろうか。この「情動や意図を持つ主体」としての他者理解は、三項関係の形成に密接に関連していることが指摘されており<sup>38)</sup>、つまり、この段階では、機能的にも認知的にも、共同

注意行動に代表される三項関係が芽生え始める段階であるといえる。

(c) 「不安・不快な場面に立ち向かう心理的安全基地」としての段階 (第3段階)

この段階では、このことは、前段階からの移行の原動力として、愛着対象への接近要求が保育者と養育者と同等になるという、第一次接近要求対象の拡大をあげることができる。このことと関連して、他者の意図や情動という心的内容についても理解できるようになり、愛着対象に対して、具体的な行動を求めだけでなく、心の支えとしての役割を求め、愛着対象を支えとして、他者と情動・意図のやりとりができるようになる。このことから、この段階では「心的世界を有する主体」としての他者理解が成立していると考えられる。これは、前段階で芽生え始めていた三項関係がこの段階で確立し、応答的共同注意行動が成立することによって、他者の視線や意図が自分とは異なることを知り、相手の情動や意図の中身を理解できるようになるためであると考えることができる。また、他者の意図の中身を知れるということは、彼らの要求行動や言語の発達にも密接に結びついていることが予想される。

神園によると、この段階にいたると、常同行動やこだわり行動が消失する<sup>39)</sup>。これは、常同行動やこだわり行動がもたらす快の情動よりも、愛着対象との快の情動を共有することの方が、彼らの中で占める割合が大きくなったことを示すものとして解釈することができる。この発達的变化の背景にも、「心的世界を有する主体」としての他者理解が影響している。また、模倣に関して、人との関係性が安定してくると、ものへの興味が高まり、対象への探索やその結果としての因果性の探



索といった認知発達があって模倣が安定し、「人を介した子ども自身の物と物との関係付けを行ったりすることによって因果性の理解が進み、他者の行動の意図や思いも受け止められるようになる」<sup>40)</sup>。つまり、三項関係が成立するこの段階では、愛着対象が拡大し、志向性も高まることから模倣が量的に増加・安定するとともに、その質についても変化が生じ、その後の表象の発生へとつながっていくというプロセスが予測される。

## (2) 愛着対象との関係性の発達から考える療育上の留意点と今後の研究の視点

### (a) 愛着対象との関係性の質の変化と療育のありかた

愛着対象との関係が、第1段階から第2段階へと移行する際、それまで母親に代表される特定の養育者のみであった「密着的接近対象」が拡大することがその条件であることが明らかにされている<sup>41)</sup>。これは、自閉症幼児が愛着対象を拡大させるプロセスにおいて、密着的接近対象とのやりとりが成立し、密着的接近対象に「快の情動」を引き起こす行動を要求し、共に「快の情動」を共有することによって、「特定の行動・場面」と「快—不快の情動」の随伴性の理解が成立するという、認知面での発達が背景にあることが考えられる。〈自己—もの〉の二項関係が先行するという自閉症幼児の最早期の発達的特徴を明らかにしてきたが、第1段階から第2段階へかけての時期に求められる療育としては、ものに比べると相対的に志向性が低い「他者」との関係性を、「快の情動」を共有する経験を通じて改善していくことである。そのため療育実践としては、保育士と共に行なう活動の中で、「快の情動」を出現させ、それを共有

できる行動や場면을創出する取り組みが必要となるであろう。保育者は、子どもが自発的に行なう遊びを全面的に受容し寄り添いながらも、遊びの主導権を握り、快の情動を共有できる活動を意図的に行なうことが必要なのである。具体的には、トランポリンやくすぐり遊び、体をダイナミックに使う遊びなどを中心として療育が展開されていくことによって、自閉症幼児に快の情動を他者と共有する経験を与えることができるのではないだろうか。また、相対的にものへの志向性が高く、特定のものに対して固執行動やこだわり行動が出現しているために、「刺激を統制し、注目してほしい対象以外が目に入りやすく、かつ各自の領域が区別された環境」<sup>42)</sup>を用意することが必要である。このような環境づくりは、TEACCHプログラムの「構造化」<sup>43)</sup>においても見られるものである。

次に、第2段階から第3段階へと愛着対象との関係性が変化するためには、「第一次的接近要求の対象の複数化」が必要になる<sup>44)</sup>。密着的接近対象が母親に代表される養育者に限らずに保育者などに拡大する一方で、第2段階では、複数の愛着対象がいる状況において、その対象への接近要求の強さによって順位をつけ区別した対応が見られることが明らかにされている。このことは、不安・不快な場面で、ものとの関係に入り込まず、自分にとって「快の情動」を引き起こす行動を愛着対象に求めるようになるほどまで他者への志向性が高まり、〈自己—他者〉の二項関係が成立することと関連しているであろう。

それでは第2段階から第3段階への発達の移行を支えるためにはどのような療育実践が求められるのであろうか。そこでは、保育者の基本的姿勢として、子どもが主体的に行動または要求できたときに、しっかりと返しを

行なうことが求められる。保育者からの「ほめられる」「はげまされる」という経験の積み重ねが、「道具的安全基地」としての愛着対象から、「心理的安全基地」としての愛着対象への移行に不可欠であると考えられるからである<sup>45)</sup>。具体的には、自閉症幼児と保育者との関係を、「快の情動」の共有を通じて、引き続き発展させていくことと同時に、＜自己—他者＞の二項関係の成立から出現するやりとりのなかで、子どもの行動や要求を受容するだけでなく、あえて子どもの意図を「裏切る」ような対応を試みたり、保育者側の意図を明確な形で伝えたり、「快の情動」を共有する場面で「共感」を返したりといったような、子ども自身が保育者との「意図のズレ」や「共感」を実感できるような取り組みが求められる。このような快の情動の共有経験を、多くの場面で、多くの人と経験することを通じて、「心的世界を有する主体」として他者を理解できるようになると考えられる。

#### (b) 今後の研究の視点

愛着対象との関係性が第3段階に至り「心理的安全基地」として愛着対象を理解できるようになると、自閉症幼児は愛着対象を不安・不快な場面で求めるようになる。その変化と関連して諸行動においても発達が見られ、相手の情動や意図の中身を理解できるようになり、「心的世界を有する主体」として他者を理解できるようになる。しかしながら、別府の一連の研究においてもこれ以降の段階は想定されていないが、この段階を持って療育実践の終着点とするわけにはいかない。最後に、やや仮説的になるがこの段階後の移行についての考えを述べるとともに、今後の研究的課題を提示する。

愛着対象との関係性が第3段階に至り、愛着対象を心理的安全基地として、さまざまな活動に参加し、不安や葛藤に挑戦し乗り越えられるようになっていく。その中で、他児との関係も増加してくることは想像に難くない。この他児との関係こそが、次の段階への移行に際して重要な意味を持つのではないだろうか。幼児期における「集団」が果たす役割とその重要性については、多くの先行研究から明らかにされている<sup>46)</sup>。同時に、自閉症幼児が集団への参加が難しく、現場における大きな問題点としてクローズアップされることも多い。このような観点からも、自閉症幼児の愛着対象の形成過程の第4段階として、「集団への参加・他児との関係」という側面から考察していくことが必要となるのではないだろうか。

この段階への移行に際して、療育には愛着対象との一対一の関係に焦点をあてるだけでなく、自閉症幼児に集団をいかにして意識させていくかが求められ、集団に参加していけるように療育内容を工夫することが必要となる。また、保育者は、集団に参加できるように援助する役割と、集団に参加できないときに支えとなる役割、そして、集団に入れたときにそれを共感する役割など、複数の役割が求められるようになる。また、これまでの段階では、保育者側からの働きかけが中心であったが、集団での相互作用的やりとりが中心となるこの段階においては、「活動を創り出す主体」としての他者を理解していく必要がある。そのため、段階の移行に際しては、遊びの中でゲームの進行のパターンを学んだり、手伝いの中で役割の意味を理解していくことが求められる。それと同時に、相互作用的やりとりの中で、他者を「活動を創り出す主体」として理解するだけでなく、自らも活

動を創り出す役割を行なうことも必要である。そのため、ものを実際に用いるだけでなく、表象的やりとりを行ないながら自閉症幼児からの発信を促すような取り組みを行い、経験を積ませることが療育には求められるであろう。近年注目されている、自閉症幼児が社会的な場面でどのように行動すればいいかなどを示したマニュアルとなっている「ソーシャル・ストーリー」<sup>47)</sup>と呼ばれるツールなども、この移行に際して大きな役割を果たすことが予想され、療育場面においてどのように導入していくことができるのか検討していくことが求められる。

## おわりに

自閉症は、さまざまな先行研究で明らかにされているように、他者理解にその障害が認められる。しかし、それらの多くは、課題が彼らの日常の生活からかけ離れ、他者との関係性を無視して成り立っており、そこで得られる知見と、日常の生活の中で見られる姿とは質的に異なることが考えられる。そこで本稿では、自閉症幼児の他者理解の発達について、「愛着対象」との関係性を尺度として、愛着対象の形成のプロセスと諸行動との発達の関連について先行研究の整理を行い、自閉症幼児における愛着対象の形成の意義と、各段階における療育のありかたについて考察を行ってきた。その中で明らかとなったものとして、以下の3点に要約する。

1点目として、自閉症幼児の社会性の発達において、二項関係と三項関係という最早期の段階からその障害が認められるということである。通常は、〈自己—他者〉の二項関係と〈自己—もの〉の二項関係が互いに関連し

つつ発達し、やがて両者が結合して三項関係へと発展していく。しかし、自閉症幼児の場合、相対的に〈自己—もの〉の二項関係の方が先行して発達するのに加え、〈自己—他者〉の二項関係の形成が不完全なまま歩行を開始し、ものとの関係性が広がることで、さらにもものへの固執性が強まるという、発達の特異性が指摘されている。また、三項関係成立の指標ともされる共同注意行動の障害は自閉症幼児の特徴とされ、早期発見のスクリーニングとの関連においても注目されている。

2点目として、自閉症幼児において愛着対象との関係性が、諸行動の発達と関連しているということである。本稿では、共同注意行動、要求行動、指さし行動、模倣という4つの行動の出現・発達について、愛着対象の形成との関連で述べてきた。これらの行動は愛着対象との関係性が変化していくのに伴い、その行動も変化する。つまり、自閉症幼児も、他者と交流する経験を経て他者への志向性が高まると、自己と他者との違いに気付き、他者を「意図や情動をもつ主体」として認識するに至り、他者の心的状態を理解できるということである。同時に、諸行動の発達と関連するということから、自閉症幼児における愛着対象の形成の意義についても明らかにしてきた。

最後に3点目として、本稿では、別府の一連の研究から示された、自閉症幼児における愛着対象の形成の3つの段階を軸として、各段階での諸行動の発達との関連と療育上の留意点に言及し、同時に、その先の段階について仮説を提示した。これまでの自閉症幼児の愛着研究は、母子関係について言及したものがほとんどであり、幼児の日常生活の中で、家庭の次に過ごす時間が長く、初めての社会的な場となり、また、社会生活の始発点とな

るであろう療育施設における、保育者との愛着関係について論じた研究は散見する程度である。しかし、母子を中心とした愛着関係のみで社会性を獲得できるわけではない。これは自閉症幼児に限ったことではなく、全ての子どもについて同質であろう。自閉症幼児の愛着対象の形成を、母子関係のみに焦点をあてるのではなく、保育者や他児との関係にまで広げることの重要性を指摘しておきたい。そのため、母子関係を中心とした養育者との愛着関係だけではなく、保育士との愛着関係の形成に関する質的なデータの蓄積、療育内容に関する理論的検討、ならびに制度的な側面からの検討などが課題として挙げられる。同時に、自閉症幼児の発達段階に応じた療育・保育を提供することが保育士の専門性として求められ、それをいかにして理論化し、フィードバックできるかが、今後の課題であるといえるであろう。

<注>

- 1) 自己および他者の目的・意図・知識・信念・思考・疑念・推測・ふり・好みなどの内容が理解できる場合、つまり自己や他者の心的状態が理解できるのであれば、その個体は「心の理論」(theory of mind) を持つとされた (Premack, D. & Woodruff, G. 1978 Dose the chimpanzee have a theory of mind?. *Behavioral and Brain Sciences*, 1,515-526)。幼児期の発達研究における「心の理論」研究は、マクシ課題やスマーティ課題などの「誤った信念課題」が考案され、さまざまに条件を変化・統制し、「他者の誤った信念」を理解できるかどうかによって、その個体が「心の理論」を持つかが検討されてきた (例えば、子安増生 1997 幼児の「心の理論」の発達 *心理学評論*, 40, 97-109.、子安増生・木下孝司 1997 <心の理論>研究の展望 *心理学研究*, 68, 51-67.、子安増生 1999 幼児期の他者理解の発達 京都大学学術出版会)。その結果おおむね4歳頃が「心の理論」の出現時期であると言われている。自閉症幼児における心の理論研究では、健常児と精神年齢(以下MAと表記)では自閉症児よりも低いダウン症児、MAが4歳を超えている自閉症児に対してこの課題を行ったところ、自閉症児のみが有意に低い成績であることが多くの研究から明らかにされており (例えば、Baron-Cohen, S., Leslie, A.M., & Frith, U. 1985 Dose the Autistic Child have a theory of mind?. *Cognition*, 21, 37-45., Leekam. S., & Panter, J. 1991 Dose the Autistic Child have a metarepresentaional deficit?. *Cognition*, 40, 203-218., 別府哲・野村香代 2005 高機能自閉症児は健常児と異なる「心の理論」をもつか *発達心理学研究*, 16, 257-264.など)、「誤った信念課題」ではかられるような「心の理論」の欠損が、自閉症の中核的な障害であるという「心の理論」欠損仮説が唱えられる契機となった。
- 2) 例えば、荒木穂積 1979 自閉的傾向児における指さし(指示行動)の発生について *幼児教育研究所年報*, 1, 5-22.、別府哲 1994a 自閉症児のjoint attention行動の発達と障害 *岐阜大学教育学部研究報告、人文科学*, 43, 147-155.、Fred, Volkmer., Kasia, Chawarska. & Ami, Klin 2005 Autism In Infancy And Early Childhood, *Annual Review of Psychology*, 56, 315-336.など
- 3) 岩田美保 2005 幼児期初期の他者理解の発達プロセス、*風間書房*, 153-171.
- 4) 別府哲 1994b 話し言葉を持たない自閉性障害幼児における特定の相手の形成の発達 *教育心理学研究*, 42, 156-166.、Dawson, G., Hill, D., Spencer, A., Galpart, I., & Watoson, L. 1990

- Affective Exchanges between young autistic children and their mothers. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 18, 335-345.、神園幸郎 2000 自閉症児における愛着の形成過程 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要、2、1-16.など
- 5) 別府による自閉症幼児の縦断的観察からの知見として、自閉症幼児の愛着対象との関係について、「密着的接近」、「不安・不快な場面で求める関係」、「不安・不快な場面に立ち向かう安全基地としての役割」という3つの段階を発達的に移行していくことを指摘している。(別府哲 1994b 前掲論文、156-166.)
- 6) 荒木穂積 2000 自閉症児の発達診断と教育的対応について、障害者問題研究、28、211-212.
- 7) 田中昌人 1985 乳児の発達診断入門 大月書店、15-43.
- 8) 田中昌人 同上書
- 9) 徳田純代・田村浩子・田辺正友 1997 自閉症児のコミュニケーション行動における「三項関係」の形成過程に関する縦断的研究 奈良教育大学紀要、46、299-311.
- 10) 徳田純代・田村浩子・田辺正友 1997 同上論文、307.
- 11) 山上雅子 1999 自閉症児の初期発達 ミネルヴァ書房、120-121.
- 12) 応答的共同注意行動とは、「誰か他の人が見ているところを見ること」であり、自発的共同注意行動は、応答的共同注意行動に加え、提示、手渡し、指さし、社会的参照などの行動によって、子どもが発発する共同注意行動である。(Yoder & McDuffie 2006 "Treatment of Responding to and Initiating Joint Attention", Tony Charman & Wendy Stone *Social & Communication Development in Autism Spectrum Disorders*, The Guilford Press, 117-142.)
- 13) 例えば、山野留美子・税田慶昭 2001 母子遊び場面にみられる行動注意② 日本教育心理学会総会発表論文集、43、235.、大神英裕 2002 共同注意行動の発達の起源 九州大学心理学研究、3、29-39.など
- 14) 別府哲 1996 自閉症児におけるジョイントアテンション行動としての指さしの理解の発達 発達心理学研究、7、128-137.
- 15) Dawson, G., Hill, D., Spencer, A., Galpart, I., & Watoson, L. 1990 前掲論文、335-345.
- 16) Yoder & McDuffie 2006 前掲書、120-123.
- 17) 秦野悦子 1983 指さし行動の発達の意義 教育心理学研究、31、255-264.
- 18) 黒木美紗・大神英裕 2003 共同注意行動尺度の標準化 九州大学心理学研究、4、203-213.
- 19) 例えば、内藤明子 1972 幼児における模倣効果と遊びによる訓練 教育心理学研究、20、69-82.、岩田美保 1998 1幼児の赤ちゃんきょうだいに対する模倣を通してみたきょうだいのコミュニケーションの発達 日本教育心理学会総会発表論文集、40、16.、山下由紀恵 2002 2歳から6歳までの身ぶり模倣の発達の变化について 島根女子短期大学紀要、40、21-30.、川田学 2005 乳幼児における模倣の発達と身体性 武蔵野大学人間関係学部紀要、2、49-65.など
- 20) 伊藤によると、模倣の出現率と年齢の関係については、1歳6ヶ月を過ぎた頃からその出現率が急激に高くなり、模倣の対象として自分よりも年齢の高い対象の行動を模倣する傾向があり、その対象の行動に注目したり、対象が持っているものや使って遊んでいるものをほしがったり、対象に近づいたりするなど、模倣の前後に積極的な興味を示す行動が認められるとしている(伊藤葉子 1986 模倣行動の発達に関する研究 家政学雑誌、37、189-196.)。
- 21) 神園幸郎・豊里優奈・又吉ゆうき 2003 自閉性障害児の社会性障害と模倣の関係について

- 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要、5、23-41.
- 22) 小山正 2006 自閉症の子どもにおける模倣の発達 神戸学院大学人文学部紀要、26、113-118.
- 23) 同上論文 113-118.
- 24) 多田昌代・加藤元繁 2002 自閉的傾向を有する児童の困難課題遂行時のモデルに対する注目・模倣を促進する要因の検討 特殊教育学研究、40、401-410.
- 25) 例えば、Courtney, M. Hale, & Helen Tager-Flusberg 2005 Social communication in children with autism: The relationship between theory of mind and discourse development., *Autism*, 9, 157-178.、萩原はるみ 2002 自閉症児の初期兆候と発達経過—超早期療育を行ったA男の事例から— 名古屋柳城短期大学研究紀要、24、167-177.、Sigman, M 1989 Social attachments in autistic children, *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 28, 74-81.など
- 26) Sigman, M., & Ungerer. 1984 Attainment Behaviors in Autistic Children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 14, 231-244.
- 27) 伊藤英夫 1994 自閉症児の対人関係の発達(1) 特殊教育研究施設報告、43、62-63.
- 28) 別府哲 1997 前掲論文、151.
- 29) 別府哲 2001 自閉症児の他者理解 ナカニシヤ出版.
- 30) 伊藤英夫 1994 前掲論文、63.
- 31) 別府哲 2001 前掲書、101-120.
- 32) Siller, M., & Sigman, M. 2002 The Behaviors of children with autism predict the subsequent development of their children's communication. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 32, 77-89.
- 33) 後浜恭子 1984 幼児の模倣：モデルとの親近性および課題特性の効果 大阪市立大学生活科学部紀要、32、225-260.
- 34) 神園幸郎 2000 前掲論文、10-11.
- 35) 同上書 7-8.
- 36) 同上書 4-6.
- 37) 別府哲 1994a 前掲論文、147-155.
- 38) 別府哲 1997 前掲論文、145-157.
- 39) 神園幸郎 2000 前掲論文、11.
- 40) 小山正 2006 前掲論文、116.
- 41) 別府哲 1994b 前掲論文、156-166.
- 42) 熊谷高幸 2006 自閉症、ミネルヴァ書房、196-197.
- 43) TEACCH とは、Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children の略であり、幼児期から青年期までの時間的一貫性と家庭・学校・地域社会をも巻き込んだ空間的一貫性を持たせた「自閉症とそれに関連するコミュニケーション障害を持つ人」に対する治療教育プログラムである。構造化とは、わかりやすく設定された場所のことであり、①子どものおかれている状況や求められている課題や指示を理解しやすくすること、②子どものおかれている状況や求められている課題や指示を予測しやすくすること、③その結果自立的な行動を可能とし、問題行動を減少させることとされている。(萩原はるみ「高機能自閉症児の幼稚園における援助と適応」名古屋柳城短期大学研究紀要、25、pp.129-131.)
- 44) 別府哲 1994 前掲論文、159-165.
- 45) 別府哲 2001 前掲書、101-120.
- 46) 例えば、利根川智子 2006 幼稚園4・5歳児の対人葛藤解決 会津大学短期大学部研究年報、63、93-98.、田中浩司 2005 幼児の鬼ごっこ場面における仲間意識の発達 発達心理学研究、16、185-192.など

47) ソーシャル・ストーリーとは、1993年にCarol Grayによって考案されたものである (C, Gray. & Garrand, J, D. 1993 Social Storys: Improving Responses of Student with Accurate Social Information., *Focus on Autistic Behavior*, 8, 1-10)。ソーシャル・ストーリーは、自閉症児を対象としたものであり、短いストーリーから構成され、多くの対象児が示す、ルールや習慣へのこだわりを利用して描かれたものである。その内容は、提示されたストーリーの場面で、何が

生じており、いつどのようにしてそれが生じて、そしてなぜ生じたのかについて明確に描写することによって、自閉症児自身の子どもを統制するのに助けるための試みであるとされる。(Rust, J. &Smith, A. 2006 How Should the effectiveness of Social Stories to modify the behaviour of children on the autistic spectrum be tested?. *Autism*, 10, 125-138.)